

## 自閉児の言語発達

(大妻女子大学)

平井信義

櫻井初穂

山崖俊子

自閉児のことばの特異性については、未だ解明されていない面が大きい。ことばの特異性を解明することは、自閉児の本質を明らかにする重要な鍵となるものと考えられる。

自閉児の多くは、はっきりと診断が確定されるまでは、ことばの発達の遅れている子どもとみられている。すなわち、親の主訴の多くが、ことばの遅れである。自閉児が、男の子に圧倒的に多く、古くから男の子のことばは「おくて」となりやすいと云われているところから、ことばが遅れていても、そのうちに発達するであろうとしばらく傍観している両親が多い。しかし、一向にことばが発達しないために、いよいよ心配になって、各種の相談施設を訪れることになる。そして、精神薄弱と誤診されている例が多いし、あるいは、返事をしないことも手伝って、難聴または失語症ではないかと疑いをかけられたりしているのが現状である。

自閉児のことばの遅れには、大別すると、三つの問題がある。第一には、自閉性が強いために、それが基盤となって、ことばが遅れているように見えるのではないか。第二には知的能力が同時に遅滞しているために、それが影響しているのではないか。第三に、自閉児のことばそのものに特異性があるのではないかという問題である。

自閉児のことばの特異性について、一事例を通して検討してみたい。

<事例T. Y.>47. 1. 6生 8歳8

本児は、ことばの遅れを主訴として、3歳4ヵ月の時点で大学の相談室に来室。それまでの生活史を詳細に聴取すると、ことばの遅れだけでなく、さまざまな発達の異常が発見される。

- 1) 赤ちゃんの頃からおとなしく、泣くことが殆んどない。一般に7~9ヵ月頃出現する人見知りもない。
- 2) ふつう1歳半~2歳半にかけて顕著にあらわれる母親への後追い行動も全くない。
- 3) 呼んでもふりむかない。2歳のとき聴力検査を受けているが、異常なしとのこと。
- 4) まなざしが合わない。
- 5) 喃語が極端に少ない。
- 6) 模倣行動が全くみられない。
- 7) 発語は2歳3ヵ月で「ママ」といったが、その後2~3の単語は出るが増えない。
- 8) 他児への関心が殆んどみられない。
- 9) ものを等間隔に並べること。(ブロック、碁石、茶わん、ビスケットなど何でも)電柱、電線への興味、カレンダー等への興味が固執する。

以上から、本児は他人との情緒的交流に乏しく、周囲の状況には関心を示すことが少なく、明らかに自閉性が疑われ、この診断のもとに、指導が開始された。

その結果、対人関係、知的興味、生活習慣ことばのすべての面において、著しい発達が見られ、現在では普通学級の1年生として通

学している。(1年就学を猶予して)

### I) 対人関係

- ① 広さ ○ 3歳10か月頃より他児への関心も強くなり、幼稚園、小学校を通じてクラスの全ての子どもについてよく認識している。
- 対、大人についても、母親との共生状態を経て、3歳10か月頃より父、祖母、先生との関係もよくなる。母親以外の人の禁止のことも耳を傾けるようになる。
- ② 深さ ○ 他児に対して、みんながやっていることに多少遅ればせながらも興味をもち、模倣する。本児が大切にしているレゴも友だちに貸してあげられる。
- 野球なども一緒にやれるが、受身的で欲がなく、ゲーム中に一人遊びがはじまったりもするが、注意されれば又一緒にやる。
- 友だちから誘われれば、いやがらないで、むしろうれしそうに一緒に遊ぶ。自分から積極的に友だちの家に行くこともあるが、大ていは、下校時なども誘われなければ一人で帰宅。
- うれしさ、悲しさ、くやしきなどの感情表現はあるが極めて淡白。(それでも、最近では母親や姉に対してはゲームで負けるとくやしがり、勝つまで何度でもやろうとする。)

### II) 知的興味

- 学校での学習は一応全教科とも、レベルに達している。とくに漢字に興味をもち、6年生までの国語の教科書で読み方、書き方、書き順共に全部学習。
- ピアノに興味をもち、バイエルにそって個人指導を受けている。楽譜を見て弾ける。

- 漢字に対する固執はかなりあるものの、模倣によって周囲の動きにどんどんついていっている。
- 買いものに興味をもち、紙に書いてやらなくても、頼んだものをきちっと買ってくる。行ったことのない店にでも教えれば買ってこられる。スーパーでも目あての品物を探して買える。

### III) 生活習慣

- 現在とくに問題になることはない。

以上のように、問題を残しながらも、本児なりに著しい成長を遂げているが、ことばの発達について、さまざまな問題がある。

- 1) 理解言語 理解力については、かなり伸びており、対話も殆んど可能だが、他に強い関心ごとがあるときは、注意を促してから話しかければ反応する。

#### 2) 表現言語

- ① 一人称が「僕」でなく「ターくん」「ただしくん」になる。
- ② 助詞の使い方が下手。
- ③ 発音が不明瞭で、あたかも口蓋裂の子どもが話すように鼻にぬけるような発音で、極めてききとりにくい。だが、現在ではこの状態はかなり改善されている。
- ④ 話しことばに抑揚がなく、一本調子。しかし、この点もかなり改善されてきている。
- ⑤ 疑問詞が出ない。「これナニ？」というべきところを「ママが読んで」「ママが云って」などの云い方になる。「どうして?」「それから?」「なぜ?」「そしてどうなったの?」などが全く出ない。

以上、本児のことばの特異性について列挙したが、これらは決して本児特有のものではなく、自閉児一般にあてはまることである。

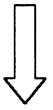
それでは、このようなことばの特異性と自閉性とはどのように結びついているのだろうか。

自閉児は、外界と接触する気持に乏しく、内界の心の動きにのみ順じて行動するため、外界への適応が困難となる。自閉児には、自分から進んで外界に適応しようという気持が乏しく、そのために、ことばを用いる必要がないのではないか。ことばは、他人との交流のための重要なメディアであるわけだが、自閉児にとっては、そのことばを用いる必要性がない。自分の要求のみを単語で相手に示せば、それで用が足りることになる。それでは、なぜ、ことばをコミュニケーションのメディアとして用いようとししないのか。この点については未だ十分に説明されていないが、仮説的に云うならば、情緒の発達の遅滞に大きな原因があると考えられ、情緒がことばを支えることによって、初めて話しことばとなることが考えられる。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



自閉児のことばの特異性については、未だ解明きれていない面が大きい。ことばの特異性を解明することは、自閉児の本質を明らかにする重要な鍵となるものと考えられる。

自閉児の多くは、はっきりと診断が確定されるまでは、ことばの発達の遅れている子どもとみられている。すなわち、親の主訴の多くが、ことばの遅れである。自閉児が、男の子に圧倒的に多く、古くから男の子のことばは「おくて」となりやすいと云われているところから、ことばが遅れていても、そのうちに発達するであろうとしばらく傍観している両親が多い。しかし、一向にことばが発達しないために、いよいよ心配になって、各種の相談施設を訪れることになる。そして、精神薄弱と誤診されている例が多いし、あるいは、返事をしないことも手伝って、難聴または失語症ではないかと疑いをかけられたりしているのが現状である。